

茨城県西茨城郡友部町

四十八塚発掘調査報告書

1998.6

友部町教育委員会

序



友部町教育委員会

教育長 宮山 茂夫

友部町には、原始・古代から人々がこの地に住み、長期に亘って生活を営んできた文化財的遺産がたくさんあります。

生活の場であった住居跡、墳墓としての古墳、兵どもの館や城跡、そして心のやすらぎを求めた寺社や信仰の塚や石仏・石碑など、こ

れらの文化的遺産は、できるだけ後世に伝えていかなければならないと考えております。しかし、一方、住みよい環境づくりをめざす現代社会の中で、文化財の保存と開発との調整は課題であり、極力現状保存を前提に協議を重ね、どうしても保存のできない場合は、記録保存の処置をとらざるをえないものもでてきます。

この度、地域の要望をうけ、町道1091号線の改良工事が計画されましたが、ここに遺跡台帳記載の「四十八塚」と呼ばれる小円墳状の塚が所在することから、これが古墳か、信仰塚かの解明のため確認調査が必要であると建設課に申入れをしました。建設課では、早速、調査費を平成10年度に予算化され、今回の調査がスムーズに完了することができましたことに敬意を表したいと存じます。

調査の結果は、信仰塚の一つであることが解明され、伝承によると、この周辺にはいくつかの塚状遺構が点在していたが、耕作等によって消滅してきたことを考へると、この塚の墳丘部を路線からはずして残すことができ、今後の民俗学的な調査研究によって、より一層文化的意義が解明されることが期待できることを喜んでいます。

終りに、この調査に関係した方々に衷心より感謝を申し上げ、あいさつといたします。

例　　言

1. 本報告書は、茨城県西茨城郡友部町大字下市原四十八 1149－3 に所在する四十八塚の確認のための発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、町道1091号線の改良工事の前に行った確認調査である。
3. 発掘調査は、友部町教育委員会が主体となり、調査は能島清光が主任となって平成10年4月1日より同年4月5日まで行った。
4. 本書の作成は、平成10年4月6日から同年4月12日まで実測・製図及び考察を副主任鯉渕和彦が行い、その他は能島が担当した。
5. 本調査において、建設課及び下市原区長国谷博通氏、地主山田誠氏と文化財審議委員小谷清治、松山成勇両氏の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。
6. 調査参加者

調査主任 能島清光（笠間市史専門委員、笠間市文化財審議委員）

副主任 鯉渕和彦（日本考古学協会会員、内原小学校教諭）

調査作業協力委員

横井 義夫 加藤友三郎 渡辺 幸友

事務局 上野 学（社会教育課係長）

齊藤 直樹（社会教育課主事）

目 次

序

例 言

1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の位置と環境	2
3. 調査方法と経過	3
4. 発掘調査の概要	5
5. ま と め	8

図 版 目 次

第1図 四十八塚実測図	5
第2図 土層断面図	6
第3図 出土遺物実測図	7
第4図 江戸時代の小原村絵図	9

写 真

・土層断面及び出土品	10
------------	----

1. 調査に至る経過

友部町は、幹線道路や上下水道の整備事業に取り組み住み良い環境づくりを推進し、これらの事業に際しては、埋蔵文化財との調整も事前に町内各課で協議され、保護保存の手立てが行われている。

平成6年、国道50号線と友部町市街地を結ぶ肋骨道路町道1級3号線の拡幅改良工事を実施した。この工事前に小原香取・坂場遺跡の記録保存のための発掘調査が行なわれ、地元民始め多くの町民から原始時代の友部町の歴史のあけぼの一端が解明され、多くの関心をよびおこした経緯があった。

今回の調査は、この小原地区に隣接する下市原地区で、共に豊かな自然にかこまれた農耕地域である。畠地や平地林を通る小道が多く走り、農道として、また生活道として利用しやすいように、ほぼ舗装されている。しかし、下市原の町道1091号線は、西方の潤沼前川悉いの低地から山林の傾斜地を昇り丘陵地に出るまでが未舗装で道も狭隘である。この道は、旧大原小学校（現小原神社前の道をはさんだ畠地）に直進する道として、昭和45年3月まで、通学路として利用が多かった。現在の大原小学校は、旧小学校敷地より500mほど南下したところに移転したが、今も学校や改良された町道への近道として利用されているが、耕作地へ出入りする耕耘機や車等の通行は十分でなく、地元住民から改良工事の要望が強かった。

町では、平成9年度に改良工事を計画し、平成10年度に改良工事を実施することとした。ところが、この路線の拡幅部分に「四十八塚」とよぶ小円墳状の遺構が所在することから、その取扱いについて教育委員会に問合せがあった。教育委員会は、遺跡として遺跡台帳に登載されていることから、現状保存を図るために、路線変更を申し入れた。建設課は拡幅部分を一部変更して墳丘部分を極力避けるようにしたが現道を基本とすることと、地主との協議からどうしても墳丘の袖の部分が、道にかかることになった。

教育委員会は、この部分を記録保存の処置を構ずることとしたが、この遺構が古墳か、信仰的な塚であるか確認をする必要があるため、建設課に確認調査を実施したい旨申し入れた。建設課は、その調査費を予算化して、早速調査を依頼してきた。教育委員会は、発掘届等の手続きについて、県教育庁文化課に問合せをした結果、確認調査であれば発掘届けがなくても調査



発掘前の状況

して、もし古墳であると確認されれば、発掘届を提出されたい旨指導があった。そこで確認できれば、記録保存の範囲をできるだけ少なくすることを前提に調査に入った。

2. 遺跡の位置と環境

「四十八塚」の位置は、西に流れる潤沼前川の低地、東に不動谷津池を水源とする低地にはさまれた舌状台地上の友部町大字下市原四十八 1149-3に所在する。

この地は、西側の低地から200mほど山林をのぼる町道1091号の小径の丘陵部分、地高81.7m地点の北側山林の道端にある。北側は山林がつづき、道の南がわは畑地がひろがっていて、塚の隣接地は栗畠となっている。

遺構から東へ150mのところに滝川集落と南友部の集落を結ぶ古道と伝えられる小径が縦断し、この道が小原地域との境になっている。ここから東は、小さな谷で、この上の畑地が旧大原小学校跡地で南北に抜ける町道1級3号線をはさんで、小原香取遺跡と坂場遺跡がある。



「四十八塚」の所在地とその環境

○「四十八塚」 ◎旧大原小学校跡

↑天王松跡 • 4597小原香取遺跡

• 4598坂場遺跡

3. 調査方法と経過

(1) 調査方法

調査は、古墳か塚かの確認をするため、馬溝検出と、土層の調査をすることとした。

まず墳丘を測量して、墳丘の頂点から南に巾80cmほどのベルトを設定し、改良工事にかかる部分の北に向って左（I区）右（II区）を発掘することとした。

全測量 $\frac{1}{40}$ 、 土層図 $\frac{1}{40}$ とし、写真はカラーを使用した。

(2) 調査経過



4月1日（水）曇り

飯田神官の祈祷による慰靈祭を催行。

参列者、調査主任能島清光、地主山田誠、区長国谷博道、事務局上野学社教係長、齊藤直樹社教主事。調査方法等打合せで、区長より遺構の保存のため、道路拡張部分の発掘調査で、この遺構の性格を解明されるよう要望があった。



4月2日（木）曇り時々小雨

墳丘測量、平板による位置測量とベルト設定。

周辺畠地を中心表面観察。

調査方法打合せと準備。
調査参加者、調査主任能島清光、副調査員鯉渕和彦、調査協力員代表加藤友三郎。



4月3日（金）晴

作業開始、調査について方法、諸注意等の説明。

ベルト左（I区）右（II区）の表土除去、墳丘外周の溝の確認。

調査参加者、調査員2名、協力員3名。

来訪者、町文化財審議委員小谷清治氏、教育委員会3名。

4月4日（土）晴

I・II区のローム層までの掘込み、まとまって農耕用ビニール片と獣銃薬きょう等がまじって出土。

I地区より鉄製包丁と土師器片1点。

II地区よりスリバチ破片、磁器製湯呑茶わん破片 10円銅貨（昭和29年鋳造）が出土する。

土層観察と土層セクション図を作成。

周溝はなく、土層観察等から信仰塚であることを確認する。

調査参加者 調査員2名、協力員3名。

来訪者 国谷区長外1名。



4月5日（日）晴

土層写真の撮影、発掘部分の測量。

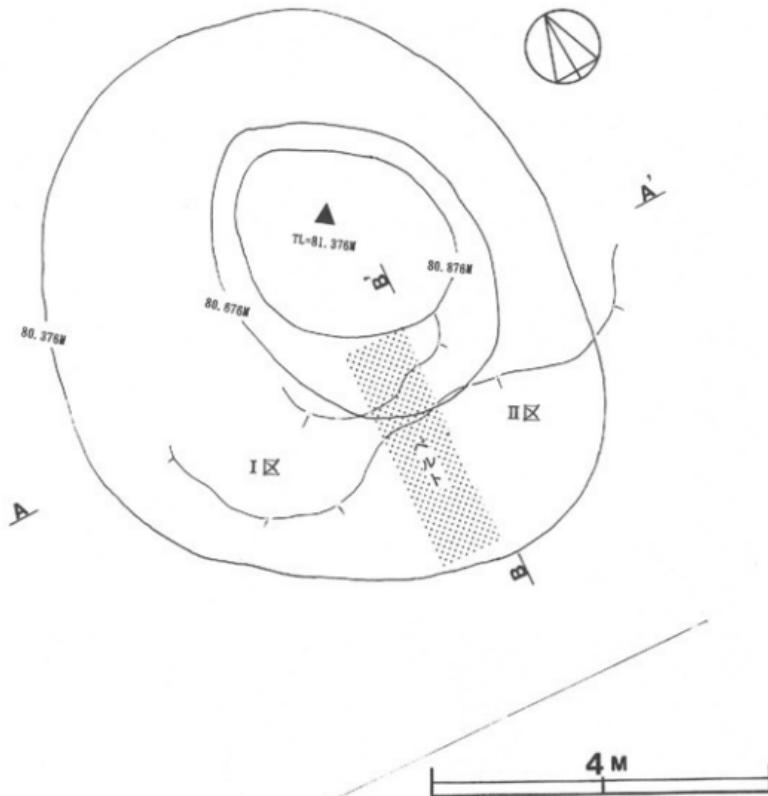
I・II区の埋め戻しとあとかたづけをして調査終了。

調査参加者 調査員2名
事務局1名 協力員3名。

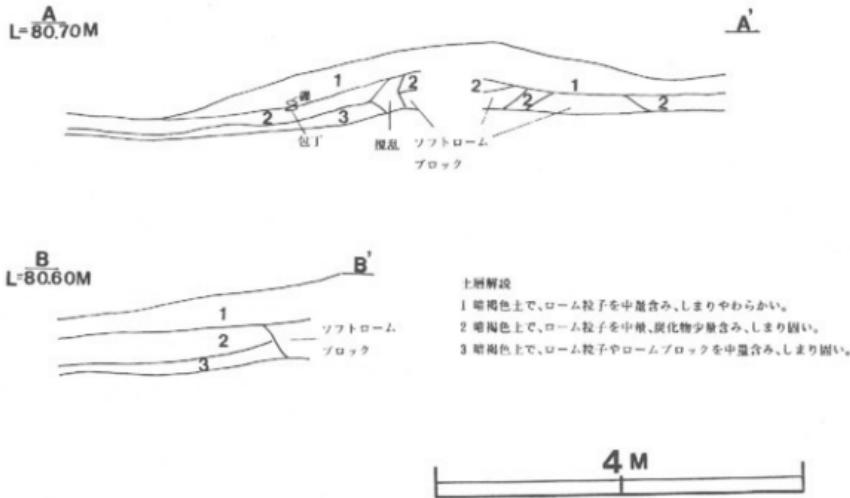
4. 発掘調査の概要

本跡の調査は、道路部分に係っている南側部分だけである。幅約1m、長さ約4mのベルトを設け、I区・II区に分けて、ローム層までを発掘した。その結果、古墳にみられる周溝はなく、標高79.62mのローム層に約1.50mほど土盛りをして構築した塚であることが判明した。

長径約7.0m、短径約6.0mの梢円形を呈し南側の上層部に、農耕用ビニール片や獣銃薬きょうがはじって出土し、ゴミとして塚に寄せた形跡がみられるので、この部分は本来の塚の盛土でないと思われた。



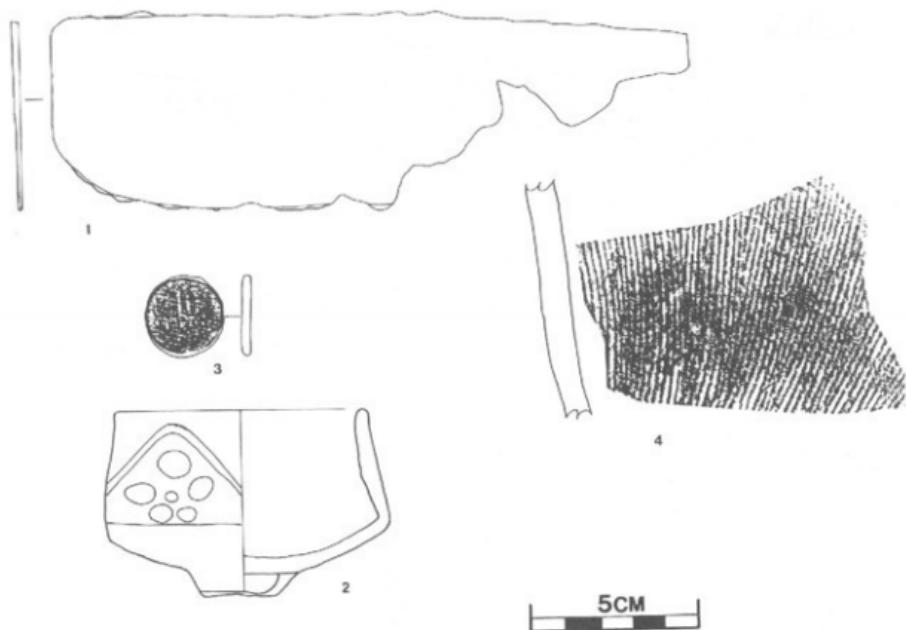
第1図 「四十八塚実測図」



第2図 土層断面図

覆土は、ローム粒子やロームブロックを含む暗褐色土で、下層では鐵を含み、中層から下層にかけてはしまりが固いことから構築時に叩き締めたものと思われる。

出土遺物



第3図 出土遺物実測図

出土遺物（第3図1～4）中層から包丁（1）、湯飲み茶碗片（2）、銭（3）、すり鉢（4）、土師器の細片、鉄屑、下層から約20cm前後の礫が中量に出土した。

1は、鉄製で長さ19cm、幅5.8cm、厚さ0.2cm、刃わたり13.2cm程である。2は、磁器で口径7.6cm、器高5.6cm、底径8.8cm、高台高0.6cmである。色調は、灰白色で外面全体に白点を施し、緑色で山形を描き、赤色の円を中心には5つの青色の大小の楕円を周り巡らしている。底部は、茶である。焼成は、良好である。椀は、内湾気味に立ち上がっている。完存率は、40%である。3は、昭和29年鋳造の銅製の10円である。4は、陶器で、色調は外面が茶色、内面が白色である。

椀、銭は捨てられたもので、土師器片、鉄屑、すり鉢片は流れ込みで、礫は塚構築時に土と一緒に使用されたものと思われる。

時期と性格 時期や性格については、調査結果からは分からぬが、文献や地主等の話から江戸時代のこころ構築されたものと思われる。

5. ま　と　め

調査対象の遺構については、遺跡台帳に『「四十八塚」、形態は小円墳状の塚とあり、地元では二つ塚とも呼ばれ、塚は二基であったが、現在はこの塚一基のみ存在している。高さは1.5m、径2m、江戸期に築かれた念仏塚、もしくは庚申塚であったらしい（平成5年6月）』と記載されている。

地元民の話によると、この周辺には、昭和30年代までは、境塚や庚申塚、念仏塚とよぶ塚があつたり、数は少ないが、石塔の破片があったという。江戸期の絵図のコピーを町文化財審議委員の桧山成男氏より、見せていただくと、残念ながらこの「四十八塚」の近くを継続する滝川へ抜ける古道より東が描かれこの「四十八塚」は記されていない。しかし、近くに「石塚」「大コン塚」がみられ今は所在しないが、県指定天然記念物であった「天王松」がえがかれている。なおこの絵図をみると、小原地内とその周辺は、多くの塚が点在していたことがわかる。地元民が現存している塚は、今この「四十八塚」だけであるので、出来るだけ残し、この塚の性格を解明してほしいとの要望は理解できる。町は、路線拡張部分を一部変更し、道路上にかかる部分の最小限の調査で、塚か、古墳かの確認がとれるよう期待されたので、その要望にそって調査することとなった。

当初から、この遺構は信仰塚と推測はされたが、峯を越した東側には、平成6年に一部発掘調査された小原香取・坂場遺跡があり、縄文時代中期の遺物（阿玉台式土器）が主であるが、中世の遺物（内耳土器片）がわずかながら出土していたので、この周辺の遺物散布状況や地形等を観察した。しかし、住居跡・古墳・館・塚等の遺跡の痕跡はみられなかった。

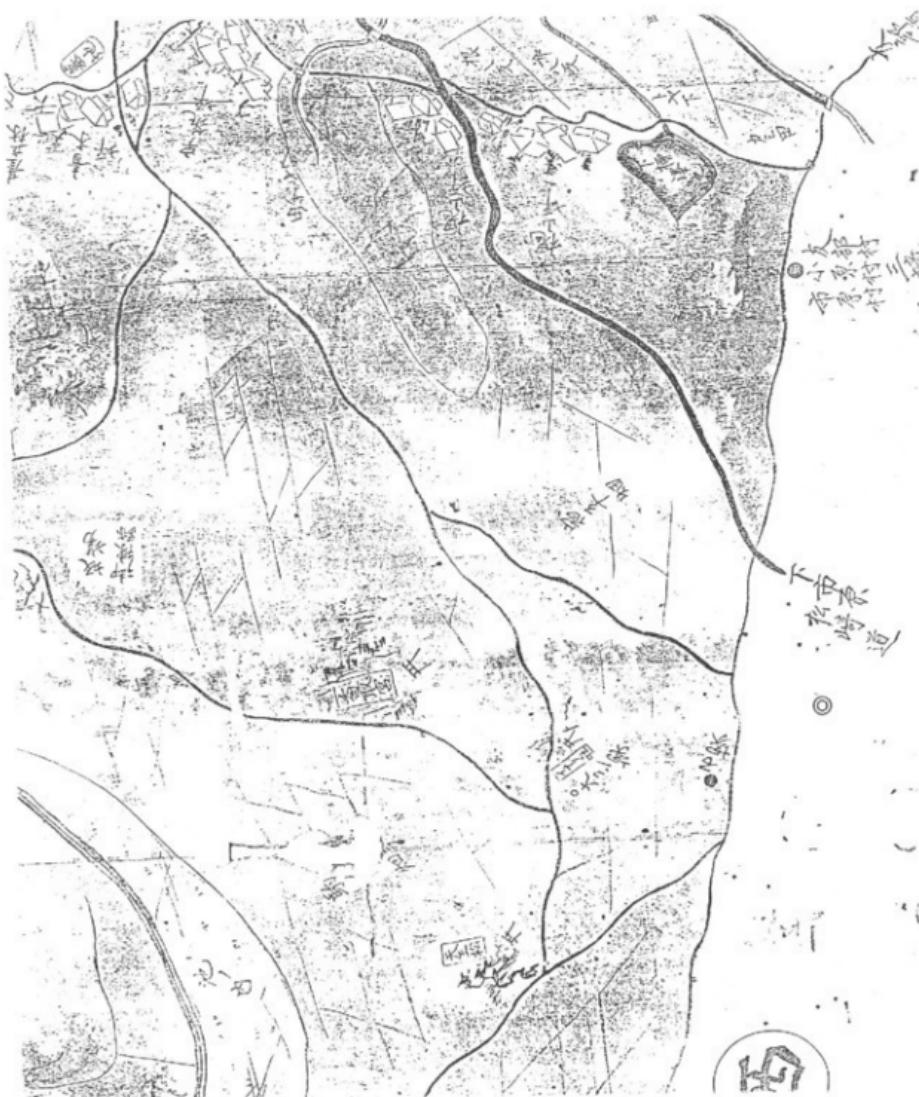
この遺物の発掘調査の結果は、古墳にみられる周溝や出土遺物は確認されず、土層観察から盛土した形跡があることから、信仰塚の一であることが判明できた。私論ではあるが、所在する地名が「四十八」といい、この塚が「四十八塚」と呼ばれていることから推察して、浄土信仰の「四十八願」に由来するのではなかろうか。

これは、無量寿經の阿弥陀仏が、法藏比丘と称した昔、一切衆生を救うために発したという四十八の誓願で、その第十八の至心信楽願、すなわち念仏往生願が浄土信仰の根本である。恐らくは、江戸期になって民衆に普及し、四十八願にちなんで、四十八夜念仏を催し、この記念として塚つきをしたのではないかろうか。町文化財審議委員の小谷清治氏からは、『四十八夜念仏は、盤を打ち鳴らして行う双盤念仏で行なわれる場合が多く、読教や仏事等の回向が終ると、自然石に「四十八夜懸回向」と刻む塔や「南無阿弥陀仏」と正面に刻み、両側に「念仏衆四十八夜供養」など四十八夜の念仏を行なった意趣や道師の名を刻んだ石塔が見られる。また道端や村境などに土饅頭を築き「名号」を記した札を埋め回向して記念とした』との御教示を得た。

この市原村は、江戸期には、天領・旗本領、そして享保三年（1718）より明治四年（1871）まで笠間藩領であった。農村統制の面と、民俗学的調査研究によって、今後の解明を期待したい。

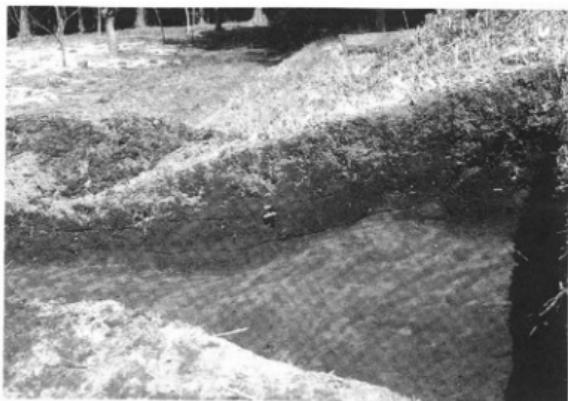
最後に、御指導・御支援をいただいた方々、地主や区長、作業に従事された協力員並びに関係者各位に感謝しつつまとめとしたい。

（能島 清光記）

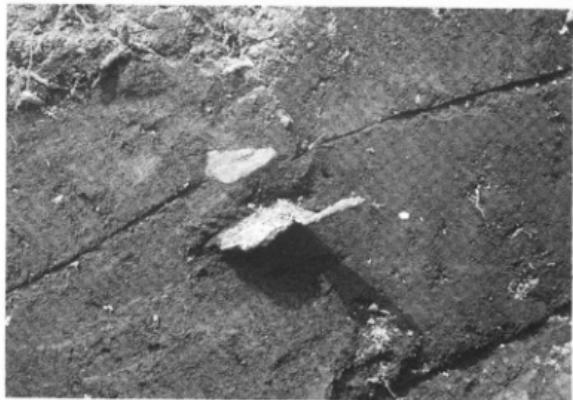


第4図 江戸時代の小原村絵図

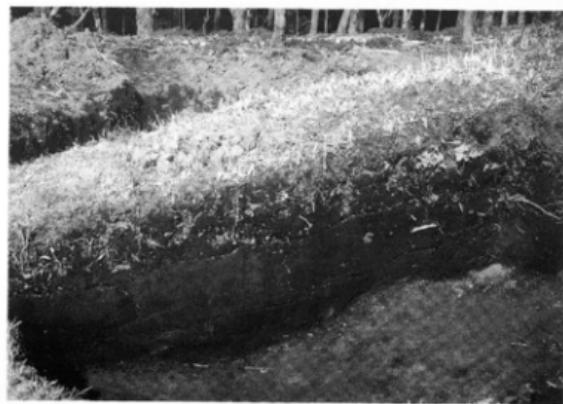
(四十八塚は、石塚の西側○印にあって記載されていない)



I区 土層断面
(A～ベルト)



I区 包丁と
礫出土状況



ベルト土層断面 (B～B')



II区 土層断面図
(ベルト～A')



発掘区の全景



出土遺物

四十八塚発掘調査報告書

発行年月日 平成10年6月

発 行 友部町教育委員会

印 刷 大塩企画

